

## [巻頭言]

岩田拓夫

### 1. 本特集号について

『言語文化研究』本特集号は、2013～15年度にわたり継続されてきた立命館大学国際言語文化研究所の研究プロジェクト（『「笑い」の観点からのアフリカの社会変容に関する研究』）の成果物である。本研究プロジェクトでは、「笑い」という社会に遍く存在しながらも、従来のアフリカ研究においては正面から研究対象とされてこなかったテーマに学際的に取り組むことを試みてきた。

現地調査中にしばしば出会いながらも、あくまでもフィールドワークの「背景」ととどめられてきた「笑い」という人々の営みに正面から向き合うことへの好奇心と興奮の熱に浮かされて出口の見通しも全くないまま開始した、文字通り萌芽的な研究会活動に対して、国際言語文化研究所からは3年間にわたり手厚いご支援を頂戴した。中でも、リサーチオフィスの柚木様、新免様、関本様、西村様には、いつも親身にサポートいただいたおかげで円滑なプロジェクト運営を行うことができたことに対し、改めて感謝申し上げたい。

### 2. 研究プロジェクトの紹介

「笑い」は、人間存在の根源に関わる多様で深淵な社会的営みであり、その理解は単一の学問的アプローチでは遠く及ばない。そこで、「笑い」というフィルターを通して、近年のアフリカ諸国における社会変容の理解を試みる上で、本研究会では文化人類学、生態人類学、社会学、政治学を専門にする研究者が学際的に交流しながら研究活動を継続してきた。

3年間にわたり継続されてきた本研究会であるが、最初の2年間の活動は「笑い」という研究会メンバー全員にとって、新鮮で興味津々ではあるものの全く不慣れなテーマの研究に着手するにあたり、枠にはまらない自由な考察を行うための場を提供することを重視した。年4～5回の研究会を開催し、メンバーによる研究発表と討論を中心に、時に外部から話題提供者を招き、考察を深めてきた。中でも外部講師としてお招きした岡崎彰先生（一橋大学）のご講演と、その後の深夜近くまで続いた議論から大きな刺激を受けた。最後の一年間は、専ら研究成果の発表と成果取りまとめに費やした。

### 3. 執筆者ならびに研究会メンバーの紹介

本特集号の執筆者（敬称略）は、小川さやか（先端総合学術研究科、副研究代表者）、西真如（京

都大学), 大石高典(東京外国語大学), 岩田拓夫(国際関係学部, 研究代表者)である。各執筆者は, 本研究会での研究活動を経て, 国内外の学会(日本アフリカ学会第52回学術大会, 2015年5月, 犬山市, もしくは, 6<sup>th</sup> European Conference on African Studies, 2015年7月, パリ)で発表を行い, そこで得られたコメントなどをフィードバックしながら本特集号の原稿を完成させた。

それに加えて, 本特集号の寄稿者には加わらなかったものの, 他の研究会メンバー(敬称略)の研究会への貢献も明記しておきたい。杉木明子(神戸学院), 浜田明範(国立民族学博物館), 大門碧(京都大学), 各メンバーによる, 研究会での発表, 議論への積極的な参加を通して, 異なる学問分野を専門にする研究者の観点を消化・吸収しながら各自の研究を深めることができた意義は極めて大きかった。本特集号は, 執筆者各自の研究成果であるとともに, 自由で活発な研究会活動全般の軌跡を記すものでもある。

西論文(『略奪婚』と『男性問題』—エチオピアのふたつのコメディ作品にみるジェンダー政治と笑い)は, 男女の駆け引きを主題とするアムハラ語コメディを通して, 伝統と近代の対立や経済格差などの社会的背景を踏まえながら, エチオピアにおけるジェンダー政治と笑いについて考察した。

大石論文(研究ノート, 「フィールドにおける模倣と笑い—熱帯雨林の中のコメディ映像の事例—」)は, 偶然に撮影されていた映像を媒介にして, 調査者が村落の住民によってものまねの材料とされていた事例を通して, 調査者と被調査者の間の社会関係の変容に笑いがどのように関与しているのかを考察した。

小川論文(「笑いにあふれた世界と窮地—タンザニアの零細商人を事例として」)は, 日々の難局を何とか切り抜けていこうとする実践の中で生じる笑いに焦点を当て, タンザニアの零細商人マチंगाの暮らしにおける事例を通して, 追い詰められた人間行為と笑いとの関係について考察した。

岩田論文(「アフリカにおける政治的変容と笑い」<sup>1)</sup>)は, アフリカにおける政治状況の変化を通じて, 笑いに質的变化が生じているのではないかという問いから出発し, 西アフリカ諸国(ベナン, トーゴ, ブルキナファソ)を舞台に, 政治体制の転換期における笑いと政治との関係を考察した。

笑いというメンバー各自にとっても未踏の研究テーマに取り組む中で, 個別の研究課題については自由な発想で考察を深めることを優先させたため, 本特集号においては自覚的に各論文の内容について調整することはしなかった。そのため, 特集号としては統一感のない仕上がりになっているかも知れないが, 研究会メンバーそれぞれが自由に「笑い」という難題に取り組んだ試行錯誤の末の第一歩を記した成果物であるをご理解いただきたい。

笑いという深く広い研究テーマに対してそう簡単に結論を出せるものではないものの, スター

[巻頭言] (岩田)

トアップとして、この研究テーマの重要性について、研究会内外（一部国外にも）において認識を共有することができた。機が熟し、より本格的にアフリカの笑いについて考察する機会が訪れる日を待ちながら、本特集号の巻頭言を締めくくりたい。

(岩田拓夫)

注

- 1) 国内外の会議で発表を行う準備をしながら原稿執筆に取り組んだ結果、英語版と日本語版のほぼ同じ内容の論文を同時に執筆することとなった。

